

発掘調査が語る吉備の歴史 4 古墳時代 3

草原孝典

【講座の概要】

日本列島に稲作が伝播し、水田経営を中心とした社会ができあがると、平野ごと、河川流域ごとに地域社会ができあがりました。やがて、それらがまとまり、弥生時代後期になると、地域の代表となる人が出現し、大きな墳丘のお墓が築かれます。しかも、地域ごとに形が異なり、埋葬される施設、お供えの土器なども異なります。吉備では双方中円形や方形、出雲では四隅突出形、丹後では方形などです。各地で強固な連帯ができていたと考えられます。それを国家のように支配権力が確立していない段階の社会的なまとまりとして、カタカナでクニと表現しておきます。

古墳時代になると、そのまとまりが日本列島に広がります。3世紀中頃と考えられます。いわゆる邪馬台国の時代です。各地に前方後円墳や前方後方墳が築かれます。それまで、様々な形であった地域の代表者のお墓、とくに最も勢力のあった代表者のお墓が、前方後円墳や前方後方墳になります。最も大きく、かつ古い前方後円墳は奈良県桜井市にあります。奈良県、地形的には奈良盆地はヤマト王権の中心であり、前方後円墳はヤマト王権が考え出した全国統一基準のある墓制といえます。ただし、大きさを除きますと、石室、葺石、埴輪など、各地のお墓の特徴がうかがえます。したがって、ヤマト王権が各地の代表者の意見を集約してまとめたのが、前方後円墳であったといえるでしょう。

今回の講座では、どうして全国統一基準が必要だったのか、また、前方後円墳はヤマト王権によって造らされたのか、それとも地域の代表者が自主的に造ったのか、といった点などを、吉備から東へ向かって大阪湾に至る瀬戸内海沿いに築かれた古墳の分布から見ていきたいと思います。

【参考文献】

白石太一郎1999『古墳と大和政権 古代国家はいかに形成されたか』文藝春秋

草原孝典2009「古墳時代前期における首長の存在形態—岡山平野における古墳の築成状況から—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号

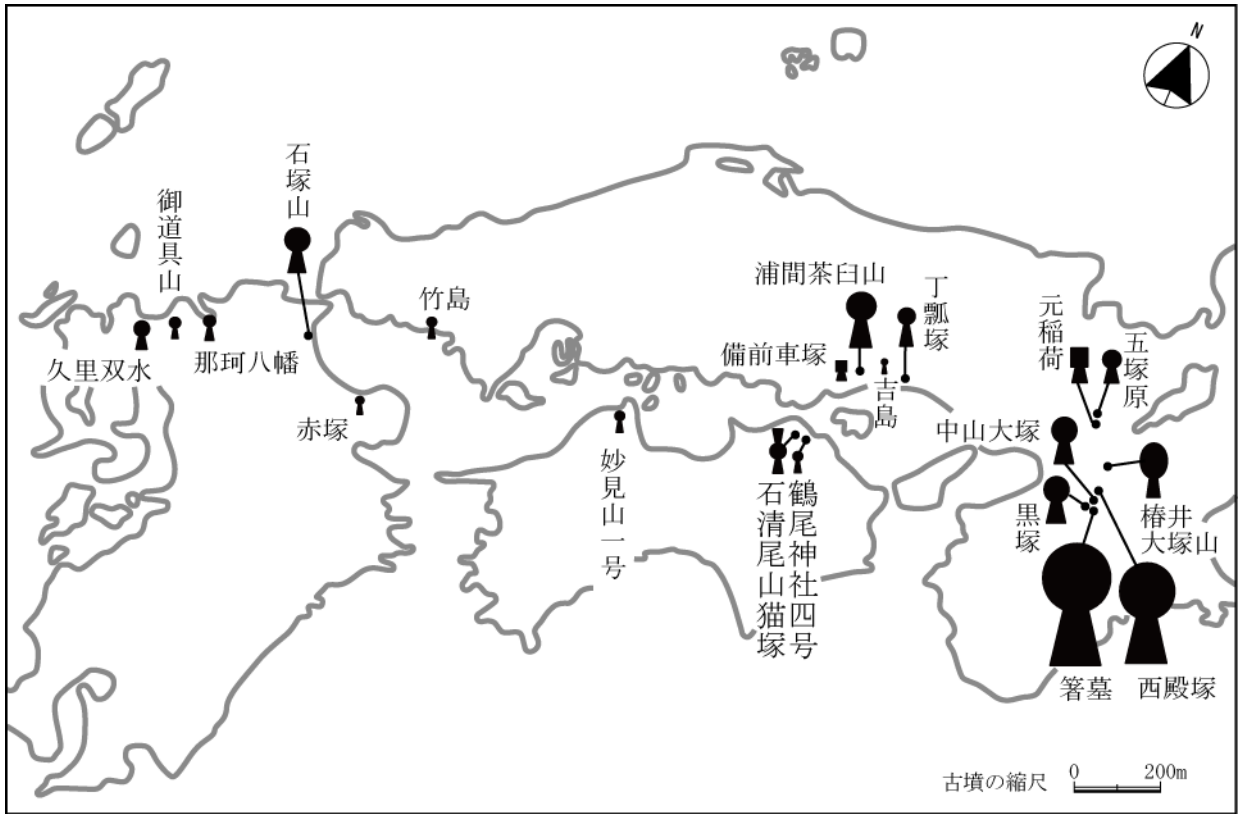


図1 古墳時代前期初頭の首長墓

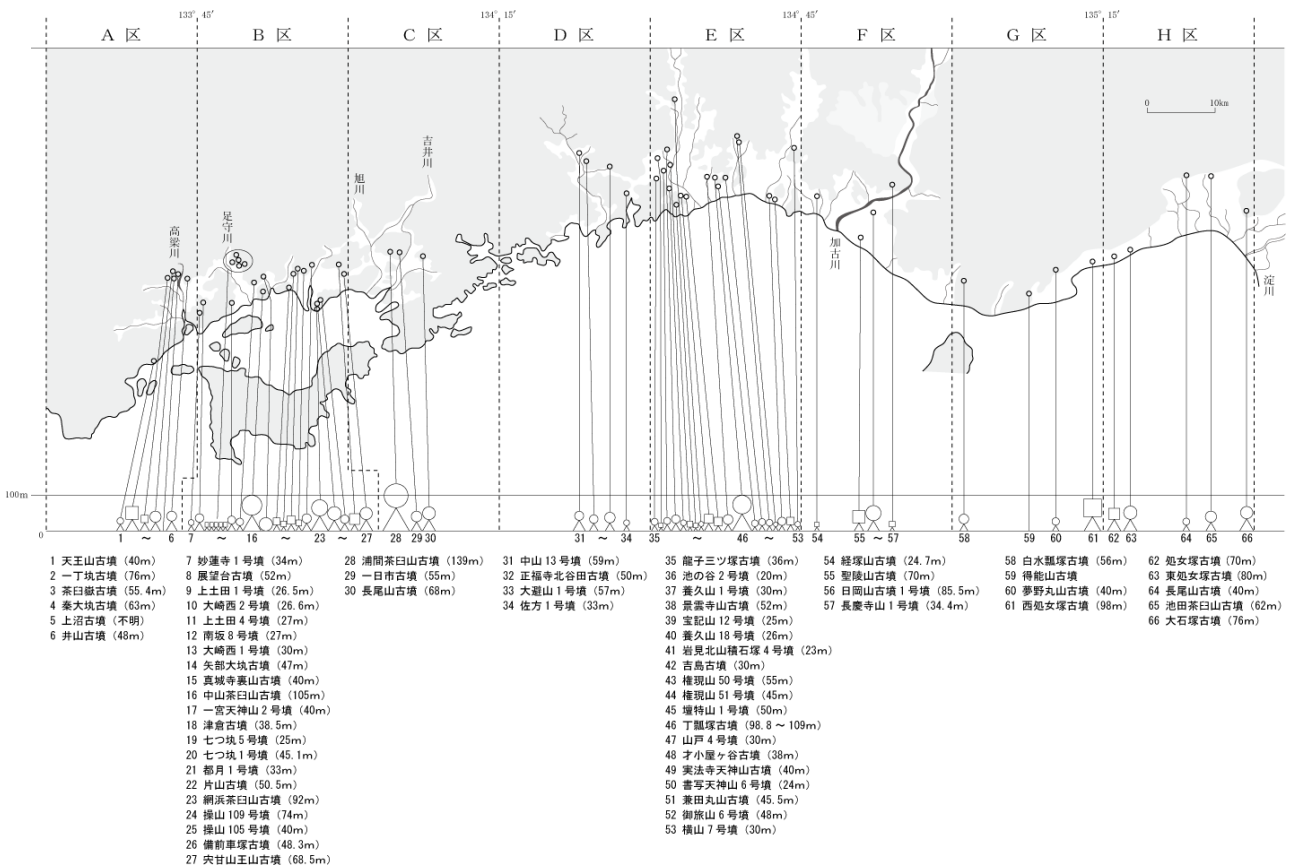


図2 前期前半の首長墓

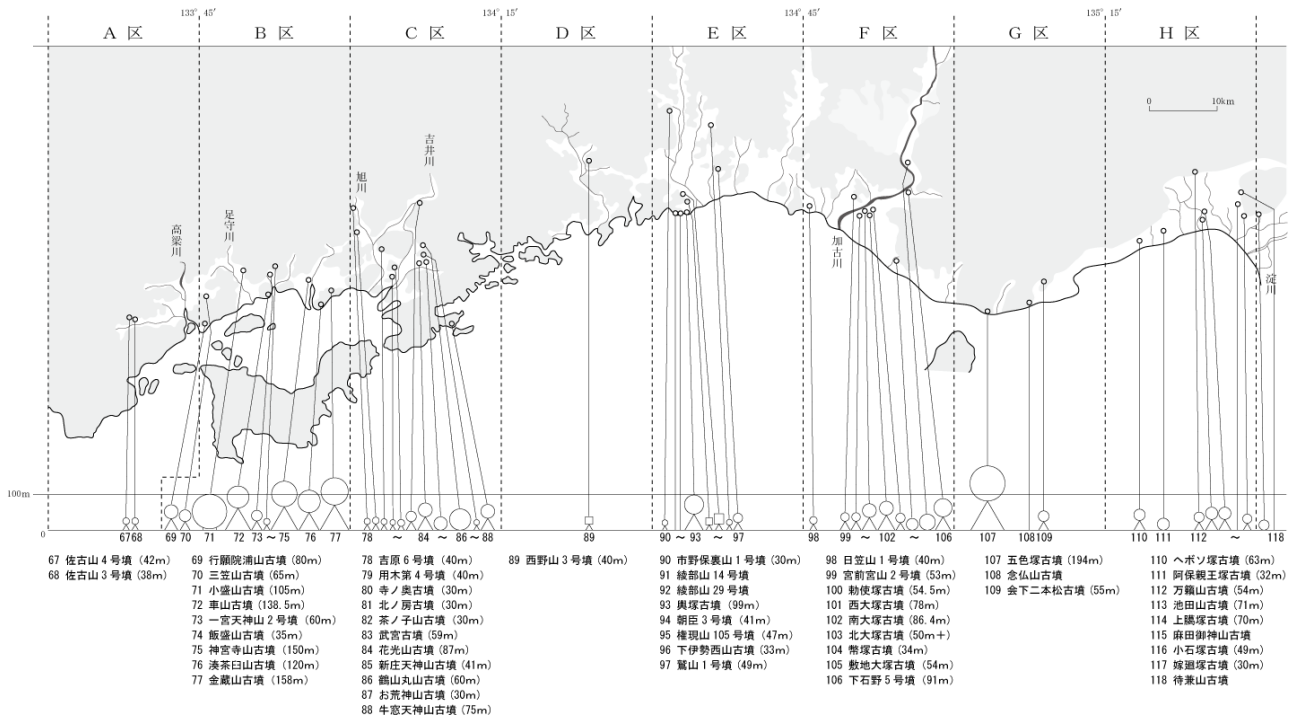


図3 前期後半の首長墓

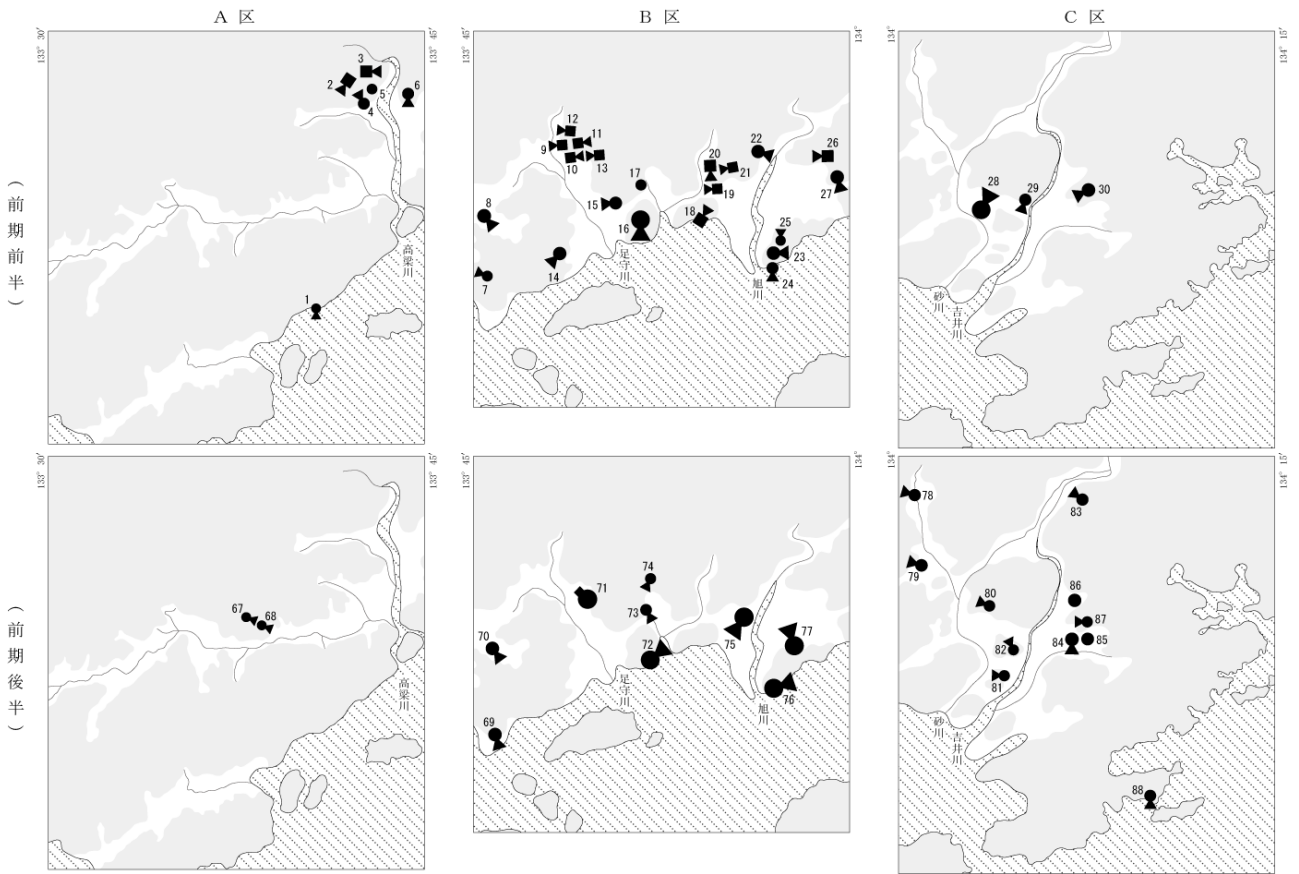


図4 前期首長墓 (吉備)

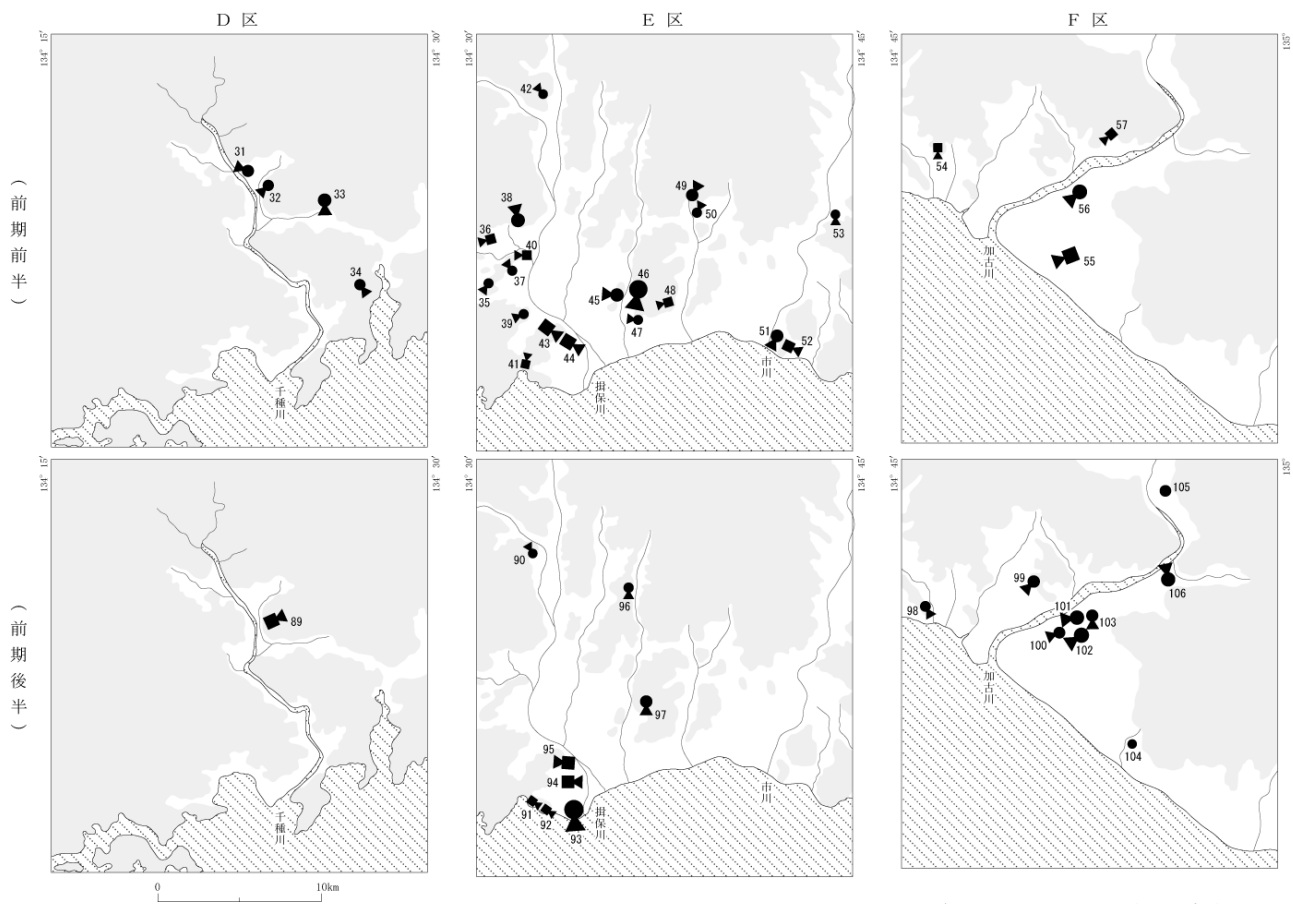


图5 前期首长墓（播磨）

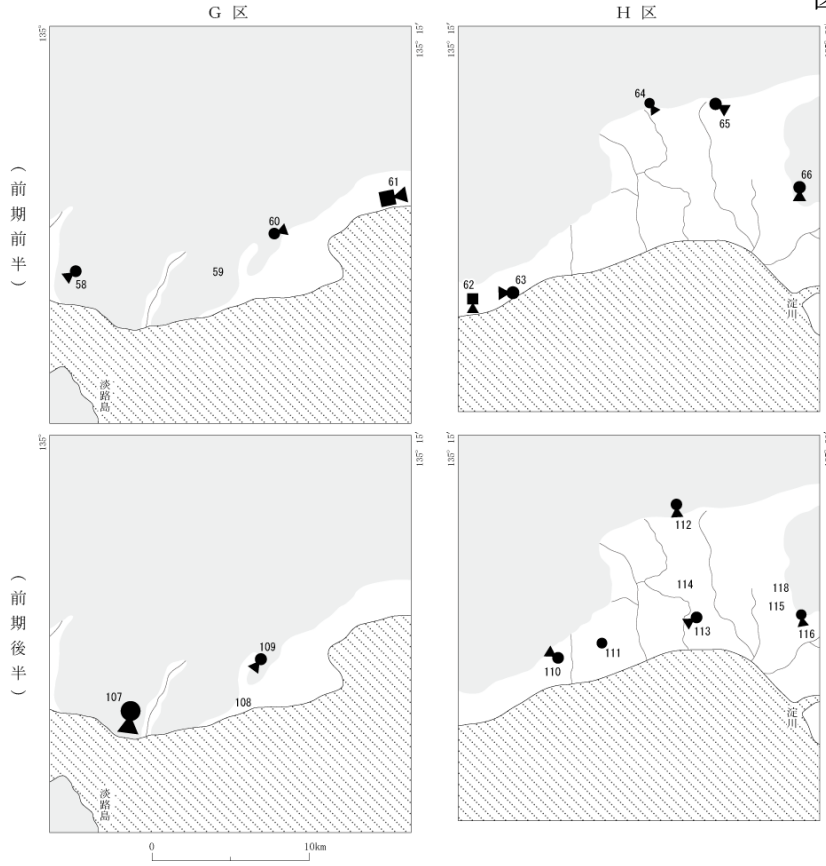


图6 前期首长墓（摂津）

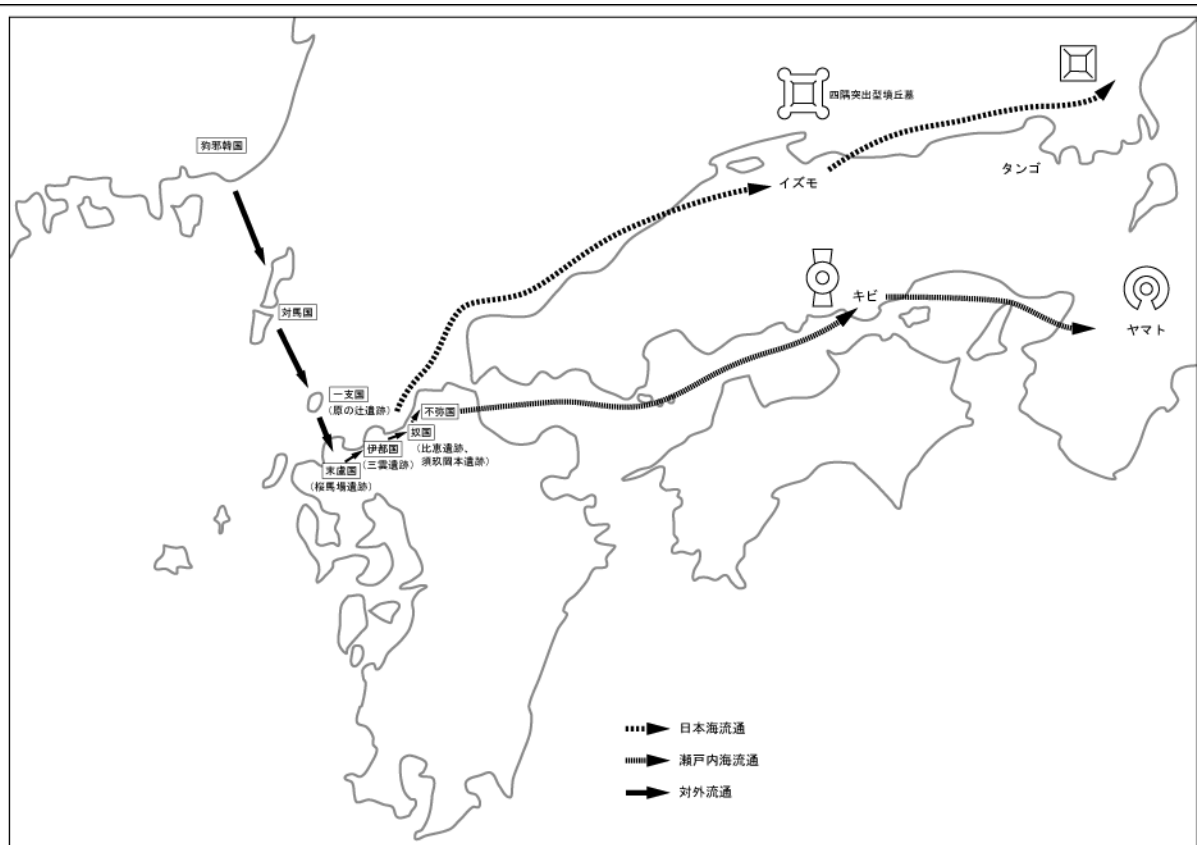


図7 弥生時代の交易ルートと墳丘墓